

# 赤軍

No. 5

前段階武装蜂起—我々の敗北の教訓

—国際根拠地—蜂起の軍隊—地下活動—

(1969年11月23日記)

共産主義者同盟赤軍派

前段階武装蜂起—我々の敗北の教訓

国際根拠地・蜂起の軍隊—地下活動

Ⅰ前段階蜂起と世界革命戦争 革命の教訓—Ⅰ—

① 日本労働者人民の戦闘性

② 革命的敗北主義と首相官邸武装占拠闘争

— 勝利的政治危機とは何か —

③ 前段階蜂起と国際根拠地建設・軍隊

— 蜂起、その世界的永続性について —

④ 蜂起それは何か。如何に準備し、如何に開始するか。

— 戦術左翼の総破産 —

⑤ 前段階蜂起—世界革命戦争の展望とは何か。

— 階級形成の現段階と我々の位置 —

Ⅱ蜂起の準備とその開始 革命の教訓—Ⅱ—

① 蜂起への着手とその挫折

② 何が解決されたのか。

— 革命の永続性、世界性と一国性 —

③ 一挙的武装蜂起の開始か、暫次的それか。

— 蜂起の開始と経済主義 —

④ 蜂起と技術、地下活動

Ⅰ 前段階蜂起と世界革命戦争

革命の教訓—そのⅠ—

① 日本労働者・人民の戦闘性

11・16、17の訪米阻止—羽田武装占拠斗争は、秘かな我々の内心の期待にも拘らず、やはり何事も起すことができず、二十人にも及ぶ逮捕を許す中で敗北し、今秋安保決戦は幕を閉じたのであった。

佐藤は、日本—世界、労働者、人民の血みどろな斗争と噴激の声を尻目に、ヘリコプターで羽田に到着し、ゆう然と米國に飛び立っていったのである。

全國に二百数ヶ所、十数方に及ぶ首都—全國を包む巨大な規模の戦斗、蒲田—品川、東京駅を中心として、新宿—池袋等の無数の諸軍団の火炎ビン—ゲバ—バリケード戦斗。学生のみならず、ほぼ戦斗の中核を占めつつあった戦斗的な青年労働者の広汎な層。日本労働者・学生、知識人等・プロレタリア・人民は、全世界に際立つ比類ない戦斗故、英雄性を発揮したのであった。全戦斗を牽引した四千名以上の中核的な突撃隊の大半が逮捕されても、斗いは持続されていたのである。

② 革命的敗北主義と首相官邸武装占拠斗争

— 勝利的政治危機とは何か —

だが、この比類ない日本労働者、人民の戦斗にも拘らず、この戦斗性は真に未来を代表する革命的戦斗力には転化されなく、敵権力の布陣の質と量に、抗すすべもなく10・21に引き続き、再び完全に敗北せしめられていったのであった。

極めて残念であるが、この「訪米阻止—羽田武装占拠斗争」は敗北すべくして敗北する斗いであったと同時に、日本—世界革命斗争の未来を代表する革命的・英雄的・戦斗的労働者・学生、知識人の革命的敗北主義の道では決つてなかつたのである。

労働者階級の戦場は、それが敗北を必至とするものであれば、明らかに覆々関であり、その武装占拠でなければならなかつた。そして、この革命的敗北主義の道は、中途で挫折したとはいえ、我々赤軍派と50数名の革命的戦士による首相官邸武装占拠斗争としてのみ唯一貫徹されんとしたのであった。

諸派が、負けるべくして負ける斗争に於て組織としての免罪符を獲得することに狂奔しているその間に於て、我が赤軍派と戦士達は、10・21の敗北的蜂起の逆流を越え、苛烈な弾圧に耐え、生を期し、死を決意し、安保決戦と全ての革命の未来を首相官邸武装占拠斗争にかけ抜いたのである。今秋、安保決戦の敗北的最终局面に於て「羽田斗争か、首相官邸武装占拠斗争か」として、一点のあいまいさも残さず、突き出された。6・8派と我々との鮮明な相異こそ「日本—世界武装プロレタリアートの今秋決戦と70年代を勝利的に荷い切る路線がいずれであるか」を明快に提出したのであった。かつ、同時に、10・17の6・8派の敗北とその後の分解、我々の計画の中途での挫折は、日本—世界武装プロレタリアートの成熟段階とその限界を如実に示したのであった。

10・21の敗北は、我々が指摘した①ビン—ゲバ軍団では、斗い得ないこと、②世界革命戦争—内戦の突破口としての武装蜂起の階級の位置付けに武装された軍事的武装—の問題を、悲しむべきことに、4・28に引き続き、再び大衆的に確認することのみを終った。二度の敗北を三度同じ様に繰り返すことは、最早、悲劇ではなく、明らかに喜劇である。この敗北的専断は衆目の一致するところであり、中核派等が如何に「10・21は大勝利」と強弁しようとも誰も信じはしなかつたし、当の指導部すら、羽田の武装占拠が可能などと思いはしなかつただろう。勿論、同様に11・16—17斗争に於ても「佐藤は、ヘリコプターでしか羽田に行けなかつた。」ことに斗争の意義を認めようとも、誰も信じはしなかつた。佐藤訪米を阻止するには、今秋、大衆がいみじくも語り合っていたように「訪米などはしてはおられない事態を創る。」ことであり「沖繩問題などに拘り合っていたら、体制が危機になる」という「安保—沖繩政策」の政治的枠組をのり越えた「権力問題」を突き出すことであつた。これは、10・21に於て、大衆追従に敏感な諸派のスローガンにも表現された「機動隊せん滅—首都制圧—政府中枢突入」を、將に文字通り実現することであつた。かかる大衆の直感や、スローガンの通常一般において意味しているものは「政治危機」であ

だが、かかる「政治危機の創出」は、政治党派にとって、これを現実に移すことに於ける革命的スローガンは、このようなあいまいなスローガンに表現されるのではなく、まごうことなく「武装蜂起の貫徹」であり、それ以外の何物でもない。

大規模な政治デモンストレーション、ストライキ、或いは「ビンゲバ」軍団による権力の前線部隊や基地、交通網ターミナル等の奇襲攻撃による一時のかく乱でもない。これ等の戦斗形態は「政府中枢機関革命戦線の樹立」を目差す武装蜂起の戦略と、これの現実に指す「敵階級の暴力装置、武装解体をめざす、軍事作戦と軍団に從属すべき性格なのだ。そして、開始された武装蜂起を最後まで維持し、その内戦を世界革命戦争として首尾一貫して大胆に推し進める政治、軍事、組織戦略とその実現の爲の軍事問題に從属し、その一環に位置するものである。決して、それ以上のものではないのだ。

政治危機は、共産主義者にとって「権力問題」「武装」の問題と切り離せないものであり「政治危機」の自己目的的創出などは、実際にはあり得ないのである。

### ③ 前段階蜂起と国際根拠地建設・軍隊

——蜂起、その世界的永続性について——

10・21の敗北こそ党派により独自の「武装蜂起の政治的・軍事的・組織的準備」を抜け落した「大衆斗争の延長線上に政治危機を願望する」大衆の自然発生的に昇った敗北の典型であった。このことは、我々於て多少ながら自ら承知して来たのだ。10・21の勝利とは、大衆の「政治危機待望」と即自的・直接的に結合することではなく、これは、日常的には全面的に分離した世界から「前段階蜂起」「世界革命戦争」の要求する、換言すれば「革命を勝利まで永続させる」為に考えられた政治的・軍事的・組織的準備と、その大胆な貫徹によって、大衆の「政治危機創出の要求」と根底的に結合することこそ必要であったのだ。それは、ほぼ以下である。

①前衛軍による機動隊のせん滅と政府中枢の武装占拠②前衛軍の指導を通過して地区大衆の可能な限りの武装と軍団化、これを楯柱にしての中核進軍

蜂起に対する党の準備とは、「蜂起が世界革命戦争に連続する」ものとして「世界革命戦争の突破口」として存在するが故に、せんじつめれば「蜂起が世界革命戦争」であるが故に、革命の永続的發展の過程に於て準備がなされれば良いという段階的準備ではなく、最初から「世界革命戦争の勝利」として、前段階蜂起の準備がなされねばならないことを意味するのである。このことは更に次のことを意味しているのである。革命の全過程に於て、永続性を保証する基本的準備が、目的意識のなされる限り、逆に実態としてある一団に於ける武装斗争も、極めて限界と試行錯誤におき、前段階蜂起を牽引し、その開始の先駆的前衛的軍事斗争を担う党と軍団に於て同様な事態に陥ることを意味しているのだ。

### ④ 蜂起それは何か。如何に準備し、如何に開始するか。

——戦術左翼の総破産——

10・21は、4・28に引き継ぎ、より鮮明に我々をして、かかる「政治危機創出」——「前段階蜂起」「世界革命戦争」に横たわる無限の困難な断層の実態を直感させ、踏み越えざるべき道筋と準備の質・内実の基本骨格を完成させ、その肉付けを与えたのであった。かつ日本労働者人民と諸派をして、この断層の間隙に迄、前進させ、立たせたのであった。この目のくらむ様な深淵、気の遠くなる様な70年代の労働者階級の未来の地平の相殺が、ほんのかすかにせよ、引きはがされ、映し出されるや否や、諸派は又、完全に戻左にブレて、我々の尻馬ののってはねてきた、戦術左派の中核も又、完全に戻左にブレて、我々の尻馬ののって、下た、下部活動家層が、我々に心情的に共感しつつ同調した結果の「武装蜂起の貫徹」の戦斗性を、彼等の革命的には無関係に許容する寛容さを示してきた。だが彼等も又経験主義・プラグマチズムも、10・21の敗北をもって、事態の核心に進み得ず、全く事態の皮相に迎合し大衆に追随したのであった。かくて、彼等は、なんのなすすべもなく、他派と同様に、羽田斗争に逃げ込んだのであった。何故なら、この根底的な境界線を踏み越えるには、経験や、大衆操作の斗いや、組織力量一般の次元を越えた革命論の核心に於て、その核心を通した、一定の基本的準備がなされることに於て、確信が持たれていない廻り、突き進み得ないものである。そして奇しくも、中核派も又、同質の

及び地区武装根拠地の獲得③権力機構革命戦線(日本)の樹立と内戦の持續を貫徹し、大胆に、大衆の「政治危機待望」に「権力問題」「武装蜂起」で結合することである。これこそが現実発展する革命の第一段階である。だが、この様な革命の第一段階を、一國的成長過程の頂点に於ける未来から逆規定して準備することのみでは、蜂起の勝利の貫徹に於ては、本質的に不十分である。蜂起は、自衛隊・米軍の反革命戦争に遭遇し、種々な武装された反革命の層の軍団を掃出させずにはおかない。これと斗うには、一団に於ける意識的層の武装のみでは対抗し得ず、これが、全人民の武装と権力に物質化される国際的・政治的・軍事的・組織的な「世界革命戦争への内戦の転化」の準備が必要であるのだ。前段階蜂起の維持は唯一、前段階蜂起という、過渡期世界に於ける、攻撃的意識性の性格からして、その本来の理由からして、世界革命戦争としてしか維持されはしないし、準備はそこから推し進められねばならないのだ。前段階蜂起として突き進んだ蜂起革命を維持し、発展させるには、だから、「内戦を、労働者国家に於ける武装根拠地からの、政治的・軍事的・支援(物質・兵器・兵員・国際義勇軍・将校・作戦統司令部の獲得等)から、内戦への参戦を楯柱として、後進国に於ける革命戦争を、日本の革命戦争と結合し、単一の世界革命戦争として推進する道しかないのである。これこそが革命の第二段階である。この革命の第二段階への成長は、遅いか早いかは別に、日米両帝国主義をして、国内反革命戦争を、国際的・反革命侵略・抑圧戦争にかりたてるだろうし、このことをもって、真に実態的な、全世界のプロレタリア人民は、世界革命戦争に決起し、自己の未来を決せんとするのである。このことは、前段階蜂起の政治的・軍事的準備の基本を以下のような基準において準備しなければならぬことを示している。

大衆の高次の自然発生的「政治危機待望」・武装の必要性の直感、党の前段階蜂起の目的意識性に媒介されて、彼等が、敵階級を解体して、蜂起のぼりつめるや否や、直ちに一國的武装蜂起の永続性の境界から分離し解体し始めるのに対し、蜂起の貫徹内戦を、党の世界革命戦争の意識性によって、彼らの一國性を世界性に昇めねばならぬこと。即ち「政治危機待望」を勝利の蜂起に昇めるには、「直接的な蜂起の準備」と同時に、「蜂起の永続性を保証する世界革命戦争の準備」の一箇二重の準備があるのである。

「一瞬の武装蜂起に向けてのソヴェト運動」に革命の基礎をおいていることの馬脚を最終的に現わしたのであった。彼等も又、生産点主義への傾斜を遂げ人民戦線左派の変質の道を歩んだのである。

実態としての革命を考えていない、全くの日和見主義者・革マル派や、未だ「マックススト」に於てしか革命を展望し得ていない青解や、これに「中央権力斗争」をとってつけた、最も墮落し切り、何の実践力もない、連合派の如き経済主義者や、或いは、前段階武装蜂起を欠落させた、毛沢東「戦争論」の垂流「軍事力主義者・戦争派、ML派が歩んできた道なのである。何故に、革命論をもつてしか、この境界線を越えられなかったのか、それは体質的に戦斗的であるから「やれる」とか、ケバ極や火炎ビンを投げた時の如くやれば「何とかなる」といった具合や、銃火薬で武装された決死隊を作った突撃隊ばいといとかいった、軍事問題・技術的指導の次元に於ては、解決がつかない飛躍の性格であるからだ。即ち明らかにこれが、武装蜂起という「政治問題」と不可分一体で、革命によって諸派のよって立つ、究極の立場を離れては、あり得ないからだ。このことは、武装蜂起を、もっともその言葉による曖昧さ、引きはがして、実態的に指定してみれば、すぐ理解されることだ。これには絶対に不可欠な銃火薬の使用訓練による敵の計画的せん滅が必要である。ところで、敵の計画的せん滅は、とりも直さず、敵の味方への全滅計画を政治的に宣言せしめることである。銃火薬等の使用は、我々を死地におい込むことであり、勝つ以外には生への展望はあり得ないのである。だから一度戦斗が開始されるや否や、勝利迄、最後迄、斗い抜かねばならない。敗北は、革命と階級と組織にとって死であるのだ。予測もつかない彈圧、個人の死刑かし、組織の暴力的解体、戦斗組織の解体等は、以前の如く、ブルジョア法を利用したり、中途で方針を転換する後退は出来ないのである。中途半端な決断こそ、革命にとって、大衆・革命家・党組織にとって最大の敵である。身を守る絶対的な条件は、個人の武装力である。だが、「革命の勝利」は、これを最低条件としつつも、二重権力状況を維持しつつ、自衛隊・米軍を解体しつつ、敵階級への社会的基盤を解体し根絶する迄、斗い抜き「蜂起内戦」を永続させることである。だからこそ不用意には、決して銃火薬類は使用し得ないのであり、一度、これが使用された場合は、究極の勝利に向け、大胆に、首尾一貫して直

進しなければならぬのだ。だからこそ、軍事斗争は、武装蜂起の政治軍事戦略の一環に位置付けられない限り、組織的には、使用されてはならないし、又、使用されはしないのである。確かに、○○○類を集めた党派はいたであろう。そして種々な軍事問題が「機動隊せん滅」をめぐって取沙汰されたことであろう。だが、「この銃火器の使用」を、我々を除いて、大胆に主張し得た党派がいたであろうか。彼等は、意識的にこのことを回避して、事態の突破の核心を「前線基地や、前線部隊」へのゲリラ活動と、大きな「軍団」「戦斗団」「突撃隊」「せん滅」等の言葉でもって、自らに陶酔し、まかしたのであった。勝利争い抜く、全ての組織構成員が承認する革命戦略のプリズムからのみ、軍事斗争は武装蜂起開始は決断されるのである。「勝利争い抜く」には、①武装蜂起の経済的・政治的・軍事的な客観的基礎の分析を通じた「いつ始めるか」の革命的マルクス主義に基づく正しい判断が必要であり、②それ以上に重要なことは、この蜂起革命の継続・永続性を保証する「政治・軍事組織戦略」の確定である。そして最後に、③「どの様に準備し、どの様に開始するか」である。

第一の政治問題について、この安保決戦を、「前段階蜂起」として実践的に、その必要性を否定し、それにとつて方針を打出した党派がいたであろうか。よし「蜂起」と、これを規定しなかつたにせよ、「政治危機」の創出を掲げなかつた党派があるだろうか。そしてその政治危機が、革命的左翼にとつて、「武装蜂起に牽引されない限り、勝利の方向はない」ことを否定し得たであろうか。私の五月の「敗北の政治危機」を見れば明らかだ。

それが、「現代帝国主義—現代過渡期世界」の内的運動と、労働者階級の成熟段階から何故に形成されるかの必然性を理解しなかつたにせよ、現代に於ける「勝利的政治危機」は、現代帝国主義とその国家の権力の性格と形態からして、「ゼネスト・デモ・ストレーシヨン」や権力の理不尽な弾圧に対する大衆の一歩的な噴激の爆発」等から、自然発生的、或いは大衆斗争の延長線上に於て突然、引き出されは決してしないのである。

第二の問題こそ、第一の問題をも判断する根本問題である。何故なら、階級斗争の突進からして、実感的に武装蜂起の必要性が理解されたとしても、それに着手するか否かは一定程度別問題であり「蜂起が永続す

る、或いは永続させ得るか」の客体的・主体的展望がない限り、「武装蜂起の必要性」も必要性一般に終るのである。

この前段階蜂起は「プロ独か、フアンズムか」の先行的対決である。市民社会に革命情勢が、全面的に成熟したわけではない。だが、この「革命より小さく、デモよりは著しく大きい」「半蜂起」の攻防は全社会的危機を、この武装蜂起を通じて、連統的・永続的に成熟させていく位置にあることは全ゆる意味で確立される。だから、前段階武装蜂起は極めて意識的な層と敵階級との意識的な権力をめぐる戦斗であり、ロシア10月蜂起の如くこの戦斗が一挙に権力が確立され、反革命が粉碎されるものでは決してなく、蜂起そのものは、その後の内戦を通じた武装による権力確立の過程である。だからこそ、一国的な次元での意識的層の蜂起の開始から、蜂起後の武装力では反革命に完全に粉碎されてしまふのである。まさに、革命の永続性は、この様な独特な攻防を引き出した、現代帝国主義の反革命侵略戦争の動向と、革命的な労働者国家に媒介された国際的政治・軍事勢力に支援され、これをも参戦させるかたちでの世界的武装力の創出にかかるのである。

革命は「政治的危機の成熟—前段階蜂起」—「前段階蜂起—世界革命戦争」として実感的に発展する。これに対して、これを発展せしめる総体としての準備は、これとは逆に「世界革命戦争—一國蜂起—武装」として、逆規定的に同時一体に準備しなくてはならぬのだ。そして、これを、一貫して永続的に牽引することこそが、軍隊を中核としての「党—軍—革命戦線」の路線なのである。

第三に、この様な前段階蜂起—世界革命戦争の準備は、大衆に対して如何に鋭く、巧妙で、大規模な弾圧が伴うものであれ、公然と大規模に宣伝され、大衆自身の準備を呼びかけていくことこそは党の絶対的な任務である。だからこそ、その準備活動そのものは逆に、国際的規模に於て、非合法に地下活動として準備されなければならないことである。前段階蜂起—世界革命戦争の展望の下、徹頭徹尾、党の活動—国際武装根拠地建設の国際活動と世界赤軍の質をもった軍隊建設は地下的に組織され、中途半端にその準備を大衆運動の延長線上に、技術的に設定してはならないのである。我々は大胆に大衆との接触を、宣伝と組織にしばり、切り換え、党活動の中心を、国際活動と武装蜂起を世界革命

戦争として闘う軍隊建設にすえなければならないのである。そして、戦闘の開始は一挙に全面的に展開されねばならないのだ。

大衆闘争の延長線上に「蜂起を接木する」程度の「蜂起—世界革命戦争」の独自の準備は、蜂起に着手できないばかりか、準備そのものもできないのである。客観的には確かに大衆闘争の延長線上に蜂起は存在するにせよ、「その蜂起への飛躍」と、その「持続」に対しては、党は大衆に対するかかわり合いを根本的に転換し、それ故に党組織の活動様式—内部生活も根本的に転換しななければならないのだ。

ところで中核派は、これこそ「武装蜂起をもて遊ぶ」典型でもあるが、10・21に於て下部活動家に武装蜂起というスローガンを提出することを許容した。だが10・21の敗北後、羽田闘争に後退し、我々は首相官邸武装占拠闘争に最終的に踏み切った。この様な分化が何故に生まれたのか。それは、かく生まれたのである。

中核派は10・21に「半蜂起状況」をいち早くかきとった。だが、その「蜂起を如何に維持するか」については、全く思いつかず、「恐慌危機—ソヴェイトから一瞬の武装蜂起」に舞い戻り、我々の如く世界革命戦争の具体的展望に支えられた「一世界性と一國性」を統合する武装部隊—世界赤軍の質をもつて「軍隊」と党の再武装を形成することはできず、一國主義者の本質を露呈したのである。もともとこの様な質の、政治・軍事・組織的準備を行なっていなかったが故に、蜂起に直面したからといってそれに対抗し得る筈はなかったのである。

かかる中核派の姿にこそ、全党派に共通する現代の新カウッキ—主義—高次の自然発生性に拜服する、革命論の帰結と実態があるのだ。かかる「恐慌危機—ソヴェイト運動—一瞬の武装蜂起」からの無基準の「蜂起の時期設定」「革命の永続性」に対する欠落「組織の改組—再武装」の欠落では、決して聞いて得ず、「負けるべくして負ける」免罪符運動—羽田闘争に帰結するのは当然のことであつたのだ。

この10・21の大敗北の後、日本革命戦線の隊列は敵権力との力関係に於て、敗北の関係に入り、全体の基調は「佐藤の羽田行き」を物理的・技術的に阻止する—結果的には「安保粉碎・訪米阻止」の個別政策粉碎闘争に、全面的に後

退していったのである。

だから、11・13の最後に残された蜂起への旋回点も、我々の首相官邸武装占拠闘争の挫折を通じて、全くの空文句の格好づけの闘争に終わったのである。青解の腰のふらついた火炎ヒン・ゲリラがその典型である。

我々は、10・21の敗北の後、敗北の種々な総括を行ないつつも、最も正しい方針である首相官邸武装占拠闘争に、その一切を集中したのであった。

我々は、10・21の中で「敗北的な蜂起の開始」として、尚、蜂起の可能性が後退したとはいへ残っていることを確認し、「蜂起の質」をもつた闘争を準備したのであった。即ち、10・21以降、日本労働者階級の左翼パネが「政策反対闘争—人民戦線派」と「武装蜂起—戦争派」に分解しつつも、尚、11・13に復現されつつ、武装蜂起の戦闘性が、国際的には日米国の11・15闘争が再編されつつ持続していることと、これと我々の「首相官邸武装占拠闘争」が結合し、再び訪米阻止を「武装蜂起—世界革命戦争」で阻止せんとしたのであった。

だが、日本—世界階級闘争の決定的な鍵を握っていたこの戦闘も、敵権力の事前検査策謀に、我々が周到な計画と組織整備を怠っていたことを、直接的原因として、粉碎されてしまった。

我々の11・15の敗北的事態こそが今秋安保決戦の最終的敗北と、16・17の完全な敗北を決つたのであった。このことをもって、我々に期待し進撃しようとしていた、広汎な心情赤軍派の層は敗北を確認しつつ、尚かつ羽田闘争の革命的敗北を決意せざるを得なかったのである。

以上からして、我々の首相官邸武装占拠闘争の挫折を通して、6・8派は、10・21以降、敗北後も、闘いを「蜂起—戦争」として持続しようとする勢力を呑み込みつつ、社共・公明等の「安保反対、沖縄奪還」を基調とする「国会解散—総選挙」の人民戦線派の潮流に闘争の基調を奪われつつ、その後の米日11・15と11・13、16の闘争を再び蜂起に向けて、左旋回させることなく、個別政策粉碎闘争に押し流され、敗北の道を歩いたのである。

### ⑤ 前段階蜂起—世界革命戦争の展望とは何か

#### —階級形成の現段階と我々の位置—

今、我々と日本—世界労働者階級、人民は、敵階級の70年代に向けた「前段

階級闘争「世界革命戦争」の世界への境界の一步手前まで、これを飛び越え、踏み入ることはできなかったにせよ、突き進んだのである。今、日本は世界武装プロレタリアートは、この世界に向けての巨大な歴史的使命の準備を推進する程まで、今秋安保決戦以前の無自覚で、即自的な蜂起とは違つて、意識的な蜂起—戦争を追求する程に自らを成熟させてきたのである。

換言すれば、我々赤軍派の、党としての「主張と任務」を受け容れる迄に、これと結合する迄に成熟してきたのである。

今秋決戦以前は、彼等は、我々の主張と活動を「漫画」として「笑い飛ばす」程に無自覚であつた反面、何かうす気味悪い「黙示録」が提起されたように、逃げたい方に魅きつけられながらも、そして、その気味悪さを「宣伝と組織」の党の一瞬の武装蜂起にむけてのソウエト運動」でもって、「一生懸命自己を合理化したらう」。

だが今、彼等は、自己の中途半端性とそれを支えた、新カウツキ派、新スターリン主義者の理論との決別を決意しつつあるのだらう。かつて妖怪にみえた我々が、彼等にとって70年代の未来を代表する「赤光」であることを自覚しはじめるのである。彼等は、他党派はともあれ、中核派が「確かに信頼できるし、よく闘う」ことを確認しはすれ、彼等が決して70年代を背負う党派とは思われないのである。

と同時に、我々赤軍派が、主張しつてゐることを「正しいような気がする」程度には信用し始めている。だが党としての「総合的な力から見れば余りにも頼りない」といふのも正しい指摘である。成長しなければならぬのは我々である。

最早、我々が、日本は世界階級闘争の早産児として、かつて歴史を背負つた共産主義者同盟の鬼子として自らを甘えさせておくことはできない。

我々以外に現代過渡期世界の革命の核心を担ふことには我々はいないし、最も重要なことは、我々のみが、曲りなきにも目的意識的に革命論に従つて蜂起を追求し、敗北し、目的意識的に革命を教化し得る党派であるからだ。我々は日本に於ける世界革命闘争の前途にならねばならぬのだ。

我々が日本で世界人民の未来を背負う真の党派として成長しなければ、労働者、人民の運命は、階級級の全く無益な、墮落、腐敗、非人道、飢餓、殺戮の権力を樹立する以外にはない。

かつ、敵の発生の経済的再編の根拠を除去するまで、戦闘を継続し生き抜く以外に道はないのである。妥協は全ゆる意味で「死」である。「勝利する迄闘い抜く」気の遠くなるような未来に、全く過去の政治や生活とは別の次元の世界に、全ゆる過去を決別して立ち入らねばならないのである。

ひとたびこの闘争を開始するや否や、立ち止まることや、後退することは絶対に許されないのである。大胆に最後まで、全てを獲得する迄突き進まなければならないのである。

そのような意味で、現在の「銃火器をめぐる軍事問題」は明らかに「革命の問題」であり、「武装蜂起—世界革命戦争」の問題であり、「過渡期世界の革命」を如何に実現するかの根本的な「政治問題」であるのだ。

だから、事態の革命的前進の方向は、次のように整理されてくるだらうし、そうされねばならない。

等、人類のありとあらゆる災禍としての侵略、抑圧に反革命戦争に自らの意志とは無関係にひきつりこまれて行くのだ。

我々は、他党派に較べ、我々のあれこれの部分的成果を自慢しようとは思わないし、鋭い問題提起や「見通しの正しい」とは思わないし、いわんや、我々にかけられた弾圧の質が、他党派と較べ異質であることに於いて、我々の敗北を合理化し、弁解しようとは思わない。

結果的には、「武装蜂起—世界革命戦争の宣伝」組織にしか我々がなし得なかつたことをはっきり確認しなければならぬ。

この確認の上に、改めて、日本は世界武装プロレタリアートの到達段階について、そして、我々の日本は世界革命運動に占める位置について、確認し、我々の総括的教訓をひきだし、任務を確認して行こう。

④の敗北の中で「軍事問題」について切実に理解しはじめたこと。だが、かかる実践上の軍事問題も、単なる軍団編成や、作戦、或いは技術上の問題ではないこと。彼等は決してこの範囲で「今度はいまややる」とは思われていないことである。明らかに、火炎ビンや棍棒の組織的軍団戦では対抗し得ないこと。

問われている軍事問題の質は、「敵を目的意識的に殺す」それであつて、決して火炎ビン、或いは殺傷しない程度の爆弾やゲバルト等の軍団形成や、ヒット・エンド・ラン」のゲリラ戦の作戦でもない。「軍団」「戦闘団」「突撃隊」「軍事技術」「作戦」「殲滅」等、軍事上の用語が氾濫し、今にも「戦争が開始される」かの如き印象を受けつつも、他方これが空語的な性格を受けるのは、明らかに党派が全くよって立つ革命論も持たず、不決断で、労働者階級の「足踏み」情況に拜跪したままでいるのに他ならぬ。

かかる意味での軍事問題の質こそは、労働者階級とソウエト運動派—新カウツキ派の不決断と動揺の表現であるのだ。だが彼らは、この敗北の中から敵を殺さなければ勝利し得ないことを、逃げたいものとして体得したのであつた。

ところで、「敵を殺す」ことは全ゆる意味で「自らを死地」においやることと同義であるが故に「勝利か死かの境界」を踏み越えた、その世界にあっては「敵を最後まで打ち破り、殲滅し、権力を解体する」まで闘い、武装された人

大きく再編成を開始するのであり、それ故にこそ、70年に於ける安保決戦闘争を巡る最終的分解局面に於いて、決定的に前段階蜂起—世界革命戦争は実現されねばならないのである。

⑤それ故にこそ、かかる労働者、人民の安保決戦へむけての、前進と革命的敗北—その中の極限的分解に対して、我々はまさに、今秋決戦以前の如く、結果的に分解を促進させるような位置に甘んずることはできず、全面的に對して、これを次の前段階蜂起にむけ集約し統合し、次のことをはっきりさせねばならない。

①前段階武装蜂起—世界革命戦争への必要性を主張するにとどまらず、②これを如何に胜利的に推進し永続せしめるのか。その実践的輪郭と必要な条件③これに見合つて、どのような政治的、軍事的、組織的準備が必要であるかをはっきりさせ、現に今から具体的に、準備することである。④そこで、これ等の我々の活動が徹底化するには、種々な曖昧な総括や、今度は意識的にすべて合理化し、日和らうとする諸党派の國際的規模に於ける、分派斗争と一体であるが故に、次の蜂起にむけ、準備を開始すると同時に、断固たる分派斗争を用意しなければならぬ。

以上のことを開始するにあたって、我々自身に対しても又、明きらかにしなければならぬことは我々が何故にこの前段階武装蜂起に敗北したかである。そしてどのようにそれを「政治的、軍事的、組織的」に克服しようとしてい

## II 蜂起の準備とその開始

### 革命の教訓(Ⅰ)

#### ① 蜂起への着手とその挫折

我々は4/28「中央権力」、斗争の敗北の経験の中で、「過渡期世界」攻撃型階級斗争を進むの糸として、今秋安保決戦が前段階武装蜂起として斗わざるを得ないこと、これに向けて斗い抜くには、革命党が「前段階武装蜂起」世界革命戦争、「世界党軍」革命戦線」の路線でしか斗い抜けないことを確認し、共産主義者同盟の再武装を獲得すべく、壮烈な党内斗争に踏み切り、革命党建設と、前段階蜂起の準備にとりかかったのである。

だが、このようにして誕生した我々でありながらも、実際上蜂起に踏み切ったのは、10/21に於いてすら、武装蜂起の開始として、極めて蜂起への着手を曖昧にしていたのである。

○以降、我々は死にも狂いで「首相官邸武装占拠」斗争に取り組んだのである。武器の収集、政府中核の調査、作戦の練りあげ、軍事訓練の計画と準備、同志達と隊員の結束作業、指導体制の大胆な分業(斗争部分と残るものとの指導部段階での最終の確認)、国際的「一國の軍事後の配置計画」等。

○以降我々はこれらのごときを、一挙に大胆に着手したのである。計画は進んでいるかに見えたが、だがこれは全く遅すぎたのである。あらゆる面に於いて準備は雑になり、周到さを欠き、技術上のミス、隊の結果と軍事訓練計画過程に行なつたのである。明確に準備不足であったのだ。短期でこれらの準備をいっさい滞りなくやり遂げるには、余りにも期間は短かすぎ、どこかに決定的なミスを犯さざるを得なかつたのである。敵権力に事前に察知されざるを得なかつたのである。

ところで、7/6以降約4ヶ月、○以降約2ヶ月の準備過程があつたにも拘らず、我々ばかり武装蜂起の貫徹の一点へ向け、活動を集中し、決定的な時点に於いては、いつでも武装蜂起に決起できる体制を何故にとりきれなかつたのか。明きらかにこれは政治上の問題であつたのだ。

#### ② 何が解決されたのか

##### — 革命の永続性、世界性と一國性 —

この政治上の問題をえぐる前に、それでは我々は何故に10/21以降大胆に前段階蜂起の質を持った首相官邸武装占拠斗争に踏み切り、準備に着手することができたのか。

— 換言すれば、何が解決されたから突き進み得、どのような踏み切れなかつた要因と傾向とに最終的に決別したのであらうか。

10/21以降の激突を軸として、避け難い決定的対決が近すぎ、全ゆる先進的階層が、死を決意して斗う時点が到来し、同志や隊の中に革命的な決意が燃え広がったからか。確かに、我々の意識は、階級の成熟段階—社会状況と離れてはあり得ない。それは、社会的、同盟内に、「死をも決意する気運」が燃え広がったから、我々は蜂起に踏み切れたのか。それと一体の10/21において、「史上最大の空手形」を出したことに對する恥しさからか。確かに、これも一つの客体的な最大の要因ではあるが、それならば10/21に於いてもそうであり、我々は踏み切れたはずである。

否、これと全く不可分な関係をもつつも、全く違う主体的要因である。

10/21以降、我々を主体的に支えたものは、國際根拠地獲得問題である。前段階蜂起後の一國の革命の限界を世界革命戦争—内戦として、國際的規模から國際的根拠地を基礎に、政治的、軍事的、組織的に持続することである。前段階蜂起の貫徹をもつて、即自的な前段階蜂起の気運を、目的意識的なものに物質化し、労働者国家に世界革命戦争の武装中核を獲得し、党組織の中核を國外武装根拠地に移し、世界革命戦争の戦略配置に基き、軍隊を世界赤軍として組織し、日本の内戦の一國の限界と敗北の不可避性を、世界的労働者、人民の日本(西独)帝國主義の「反革命と戦争」に對する気運を統合し、帝國主義心臓部に於いて、内戦を持続し、國際的に突破することであつた。

我々赤軍の作戦は、その当初に於いて國際義勇軍の派遣、糧秣、兵員の交換、補給、在日日本軍人の訓練等から始められるだらうし、近代兵器の使用は前提である。

我々はここに於いて、前段階蜂起—世界革命戦争につきまತ್ತた弱点—これは権力の先制的予防反革命の中で、従来の古い政治的陣地、大学、工場、地区等が根こそぎ制圧される中で、ますます鮮明化しつつあつたが、前段階蜂起を、世界革命戦争との無媒介的な関係—一言で云えば、「革命の永続性」という問題に於いたつた。

誰しもが、今すぐたとえ蜂起が圧倒的に勝利的に突き進んだとしても、工場や地区や、大学、農村が、恒常的な軍事根拠地に転化するとは考えられなかつたのであり、それ故に内戦が、系統的に持続されることに展望を見出し切れなかつたのである。

だが、日米前段階蜂起を背景にしての日米人民の結合、そしてキューバ、北朝鮮、北ヴェトナム等の左旋回をてこととして、具体的な政治上、軍事上の作戦の拡大は、これらの基地を軍事的なものとして維持し、内戦を闘う軍隊が現実的に展望し得、革命の持続を展望し得たのである。

まさに、現代過渡期世界の革命は、連続的な、武装蜂起—國際武装根拠地—軍隊をもつて永続性を保証させ、世界革命戦争として、当初から斗われねばならないのである。これに媒介され、基礎づけられてこそ、初めて「世界党—世界赤軍—世界革命戦線」の組織路線は実態化するのである。

我々は、10/21の敗北に倒れるまで、これ等の問題に解答を与えることができなかった故に、大胆な、より大胆な前段階武装蜂起に着手することは出来なかつたのである。何故ならば、我々が総括する革命の永続性の問題に解答を得た、前段階武装蜂起はより大胆で、突き進めば突き進む程、國際的根拠地獲得、そしてこれを媒介にしての内戦の世界革命の転化に有利であるばかりか、これを不可欠とするのに對して、これに無解答である場合、いくら前段階蜂起の必要性が確認されても、革命の持続を一國のみにしか展望し得ない故に、世界革命戦争は遠い未来に遠のき、必然的に武装蜂起の問題は回避され、軍事斗争—一般の追求としての「前線基地解体論」や「反包囲討伐論」として「蜂起の現実的着手」を「蜂起の開始」としての10/21に終ることとなるのである。

「蜂起の質をもつた軍隊建設」よりは「ヒット・エンド・ランに卓越したゲリラ型軍隊」になつたとして、曖昧化され、下部では「蜂起の準備をする党活動—蜂起の軍隊—蜂起をその後の内戦に對して、軍隊を支援する革命戦線」で

はなく、その逆に「軍事斗争を蜂起抜きで戦争として闘う党活動—ゲリラ型軍隊—大衆斗争を闘う革命戦線」そして、或いは軍隊に對する地区からの不満と入隊拒否、軍隊自身のそう失等として、事実上「大衆斗争の延長線に軍事斗争」を接しする傾向となつて現われたのである。

そして、この根拠に於いて、革命戦線結成が何か特効案かの如く思われ、質的転換を否定した大衆運動主義、経済主義が生まれ、一定程度許容されてきたのである。革命的前進の開始が一定程度実現した、これ等の傾向は、9/5—大阪戦争以降、大阪戦争—9/30の敗北を経て、同盟内に広汎に形成され「蜂起にむけての計画的な準備」と「蜂起を如何に開始するか」の政治的基準は一定程度喪失したのであつた。

9/30以降、既に蜂起へ踏み切る決断と、蜂起を開始する一切の準備に突撃する要請がまじつたあるにも、権力の先制攻撃、他派の不決断大衆運動主義にゆきおられつゝ、且つ、大阪戦争—9/30の敗北からの右翼的反動が形成され、我々は10/8・9・10の、そして10/17斗争等の大衆斗争の延長線上の「前線基地解体論」や、「武器の使用」(実は「蜂起」の問題)に決着をつけていない「反包囲討伐」の中途半端性によつていたのである。今このことは、はっきり政治局、CCに於いて自己批判的に総括されねばならない。

10/21は、我々にとってこの不決断、動搖の総体であり、これは「蜂起の開始」という極めて曖昧な意志一致となつて現象したのである。

#### ③ 一挙的武装蜂起の「開始」か、暫次的それか。

##### — 蜂起の開始と経済主義 —

それでは、再度10/21以降、何が解決され、どのような極格と、政治傾向に決着をつけたら、首相官邸武装占拠斗争は前進し、且つ、何故に失敗したのかについてまとめてみよう。

④ 解決されたのは革命の永続性という問題である。前段階蜂起を如何なる性格で斗い、これを如何に持続するかであつた。我々の共通点は軍事斗争を実現し、機動隊を「武装殲滅」せねばならぬこと。かつ武装蜂起を貫徹することに於て、確固とした一致点をもつつも、必ずしも前段階蜂起の性格の全貌については、明確な基準をもつていなかった。これには、大きく言って、二つの考

え方が、諸個人の中にも混在して存在していた。その一つは、徹底して政府中核の武装占拠を一挙的に行なおうとする傾向であり、他の一つは、敵の前線基地・前線部隊を粉砕しつつ短期間で、政府中核に向け、軍事的勝利の包囲網をつみあげてゆくという考え方である。

前段階蜂起が、武装蜂起である以上、どちらの傾向も政府中核の武装占拠をめざす点に於て、一致点をもちつつも、これに向けての蜂起の開始の在り方については、明確な相異点をもっていたのであった。

前者の傾向は、我々が、7/6以前から確認し、主張してきた基本的意見である。だが一挙的「中核武装占拠」を行ったなら、赤軍派そのものが、組織的に壊滅させられてしまうこと、そればかりでなく、その後の革命を防衛し成長させてゆく、軍事斗争を継続してゆく軍隊の建設、拡大の環に軍事基地建設について、解答が与えられていないが故に、弱点をもっていたのであった。勿論、このことを通して、大衆の覚醒と一時的武装が開始されるが、この軍事斗争を統合し、再生産してゆく、党組織と軍隊の拡大再生産していく展望を支える軍事基地建設の問題は、依然、一国的規模では、解決は与えられてはいなかったのである。

何故なら、現に、今秋決戦が開始され、権力の先制攻撃が、大学、拠点工場、地区をおそう中で、階級形成の媒介環、党組織と軍隊を如何に維持し、発展させてゆくかについて、極めて現実的、実態的な要求がつきつけられ、革命的敗北主義の現象の一面としての玉碎主義を濃厚に併せていたのであるからである。

後者の傾向は、前者の意見の限界に寄生する意見であった。それ故に、前者の意見の問題点に積極的解決を与えるのではなく、消極的な意見であり、それは、或る線を越えれば、我々が連合派と論争した武装蜂起抜きでの「革命戦争」主義、これは、全くの日和見主義で、ソヴィエト運動論の一変種でしかないものに變容する性格であった。

即ち、決定的な決戦を媒介せずに、軍事斗争を市民社会未端で持続し、勝利をつみ重ねつつ、組織維持を基地建設を政治ヘゲモニー一般、即ち革命戦線の結果力の中から模索していくという考え方である。

これ等の傾向は、必要以上に、軍事技術と非法技術を強調する傾向にな

化してゆくことである。かつ、米・西欧等の即自的前段階蜂起を対目的なものにして、後進国革命戦争を先進国と実態的に結合させねばならぬのである。

この発展構造は、一般性として確認されてはならないのであり、70年代の帝國主義列強の動向と現在の労働者階級の国際的陣営配置を計算に入れた上で、世界革命戦争の「防禦」対峙「攻撃」の戦略配置の中で有機的・実践的に位置付けられねばならない。(この点に関しては、後述する)

⑧ 我々は、この問題を決着付けることによつて、ここから派生した諸問題の曖昧性を整理しえ、克服していったのである。この解決を抜きにしては、根強い様々の諸問題を生み出すのであるが、この解決が与えられることによつて、それは、無意識的にも克服し得る性格のものであったが。

⑨ 一挙的蜂起の一点に集中することによつて、党活動の中心は、蜂起の準備(国際活動と中核戦略作戦と軍事訓練)と、決して、革命戦線の蜂起貫徹と離れて(ゲモノー強化ではない)に集中され、そのように運営されていった。とりわけ、大衆運動の延長線上に、蜂起戦争を接木する傾向との関連であった。

党組織活動の地下活動への切り替えの徹底性を克服せんとしたのであった。この不徹底性は、大衆闘争の追求、或いは、既成の大衆組織から大胆に分離し切れないことから起つていた。

我々は客観的に、完全に非法活動に追い込まれていながらも、これに対応し、その政治活動を全面的に転換することに意識的になかった。

(b) 軍建設の問題は、蜂起の軍隊(蜂起抜き)の戦争の軍隊ではなく、としての基本線を与えられることによつて、そして何よりも、これに伴う敵をせん滅する銃火器の使用に決着つけることによつて、軍事訓練の在り方、兵站活動への参与の仕方、日常の存在様式(特に、個別闘争との関与)或いは、地方軍、ゲリラ軍との区別、地方軍、ゲリラ軍の性格と任務)等を確定した。そして最も、重要なことは、党組織の中核カードルを、軍の党的指導に集中し、ここから党運営「党内秩序」を作り直す必要性であった。

(c) 革命戦線とそれを主要に構成する地方軍、ゲリラ軍の性格は、蜂起に向けて、前衛的軍事斗争を貫徹する部隊と明確に区別され、従来の地区党CAP

り、他方で、大衆の結果に力点をおく傾向となるのである。何故ならば、前段階蜂起という決定的な決断を、その実践を通しての先進的層の覚醒を通して公然たる軍事基地建設の方向を喪失しているが故に、どうしても従来の大衆運動の延長線上に軍事斗争を接木し、その中途半端性、技術、大衆の一般的支援で補つていくとする考え方に、この意見は落ちていくのである。これらが、「世界革命戦争論」と「重厚」になることによつて蜂起の集中心力を弱め、経済主義的傾向を生産していくのである。

10/21以降、我々は、「前段階武装蜂起の性格」蜂起の開始の仕方」を巡る「我自身」の矛盾、革命の永続性という問題を、一国的視野からではなく、国際的視野「それ」も、理念としての「国際主義」や「世界革命戦争」ではなく、実際主義的実践の推進という実践的政策の次元に於て、前段階蜂起論が、一國主義の貫徹に伴う袋小路「玉碎主義」の傾向と蜂起抜き軍事斗争「遊撃戦主義」を克服していったのである。

前段階武装蜂起の貫徹を経ての反革命の嵐の中で軍事斗争が持続され、統合されてゆくには、散発的・非系統的・一時的軍事斗争に後退してゆくことを、国際根拠地を前段階蜂起の徹底した大胆な展開を基礎に獲得し、日本赤軍と国際義勇軍を統合しつつ、日本の内戦に繰り込み、この再生産構造の中から、日本全国に軍隊を駐屯させ(これは、農村でも、山岳地帯でも、或いは、都市でも)、政治的、軍事的に有利であればいい)政治的基地を軍事的基地に再編してゆくことである。

かかる、蜂起と「軍隊」根拠地」と国際根拠地の関連は、蜂起の貫徹の質と規模がより徹底的であればある程、党建設と軍隊建設に於て、有利であり、可能性をもったものとなるのである。そして、これ等のことは、我々の世界革命戦争の基本的性格を以下(の)として発展的に確定、把え返すことができるのである。すなわち、先進国に於ける革命戦争は、前段階武装蜂起をかかると国際根拠地を媒介し、戦略的統合地点としつつ、幾度となく繰り返して、連続しめることであり、この蜂起の成果をもつて、革命家と軍隊は全世界に全国に分散し、勿論その分散点は、基本的に、工場・大学・地区等生産点である、「党組織の強化」拡大「軍隊建設」革命戦線の強化」等の組織活動を行い、内戦を次のより巨大な武装蜂起に統合し、蜂起毎に世界革命戦争に実態

等、地区革命戦線の中核は、軍の中核になるべきであり、地方軍、ゲリラ軍、及び、革命戦線の活動は、大衆闘争を行いこれを主要なテコとして階級形成をするのではなく、明確に蜂起の兵站線として同盟のシンプで構成されたいと云うことであった。党は、これに対して、宣伝と学習会等の組織活動を行えばいいのである。かくて、革命戦線の自己目的化、中央軍へのこれを根拠にしての入隊拒否等の傾向を最終的に粉砕していったのである。

#### ④ 蜂起と技術・地下活動

我々は、10/21以降、その敗北的中間総括を経て前段階武装蜂起を世界革命戦争の視野から位置付け、革命の永続性について、解決策を得ることによつて、根本的政治問題の質を最終的に解決した。だがあらゆる意味で、作戦を技術上の次元で、緻密に計画的に推進してゆく点において、敵階級の攻撃に対して劣ることによつて、完全に粉砕され、五十数名の最も革命的同志と中核指導部を失ってしまった。これは弁解の余地なく、自己批判されねばならないものである。

第一に、この根本的原因は、明らかに、何度も確認されてきたように、技術上の次元で解決つかない、政治上の問題が併存していたこと(即ち、革命の永続性、具体的には蜂起の性格に伴う、蜂起の準備及び開始の仕方についての…)が確認されねばならない。この問題の未解決こそが、我々(とりわけ、指導部)に不決断に追い込み、蜂起の開始の仕方の曖昧性から、蜂起の準備の仕方における系統性「計画性を喪失させてしまった」こと。そして同志連の政治的動揺と活動的非系統性を与えてしまったのである。かかる準備不足と短期間の準備こそが、作戦を極めて雑な、緻密性を欠くものにしてあり、敵に全面的につけ入るべきであった。政治上の問題と軍事・組織運営上の技術とは、不可分一体であり、すぐれて諸技術上のミスは、政治上の問題に帰因しているのである。

このことは、大阪戦争、9/30における〇〇斗争が貫徹されなかったことに端的に示されている。10/21に於ける作戦の雑さ、指揮系統の乱れ、軍事技術

上に於ける無関心等に集中されていた。

○斗争は、その質に於いて、武装蜂起の質と同質の、極めて攻撃的質であり、「蜂起」の政治上の未決着点であった地点では、軍隊の献身性・技術力では越えられない壁であったのだ。あの時点の第二戦術は比較的容易に、技術的な問題もこなしつつ二度とも貫徹されたのに比し、○斗争が二度とも貫徹されなかったことを考えれば明らかである。

10/21に於て、銃火器の使用に決着付けられていなかった事に象徴される如く、隊員の政治的意志・一致の質はバラバラであり、組織性・規律は欠いていて、作戦を貫徹できるものではなかった。

10/21の種々な、技術上の欠陥は、すぐれて組織と隊員の精神的動揺に根ざしていたのである。これがそが総体としての作戦遂行能力を大幅に減退させたのである。第二に、だが決して、我々の計画の挫折を、政治上一般の問題に還元し去り、技術上の我々の非卓越性について、陰蔽することは決して許されはしないのである。政治上の問題を前提にし、それを根にしつつも、相対的独自に技術上の脆弱性を我々もっていたのである。これは、とりわけ9/30以降、決戦の前哨戦をすぎ、本格的な権力との対決を全面化する時点から、露呈し始めた。即ち、政治上の問題が技術上の問題と深く結びつき、政治上の問題が獲得されない時点から、この時点は、政治上、技術上の要素を総動員する俗に言えば、「駆け引き」が死命を制する「詰り」の段階であった。(技術討論の問題)

作戦の立案・意志一致の仕方、武器の知識、訓練、兵站、活動の連絡、非合法の諸技術等、そして、10/21に於ける武器の無知識・軍事訓練の欠落を、これを「応解決して」、「駆け引き」の段階での用兵上の問題に集中した。大菩薩峠の諸技術等、種々の「軍事」非合法」の諸技術上の決定します。これ等は一体何が原因であり、どのように解決すればよいのか。その技術上の多くのミス許している点は、次のことである。

第一に、我々に対して、法律等、全く関係なく、ありとあらゆる方法を使って、我々の方針と組織を毀滅させようとするに對する無自覚であることに起因している。

敵権力は、不法な逮捕、獄中でのリンチ等をもつての自白の強要、マンツール

伝達されねばならないこと、我々の獲得しなければならぬ党と軍事組織の質は、「武装蜂起」世界革命戦争」を地下活動として準備し、公然と貫徹する非合法地下組織でなければならないのだ。

第三に以上を踏んだ上で、ちよう報活動、通信、或いは、軍事技術上(兵站上)の諸技術をプロフェッショナルに技術として卓越することに徹底しなければならぬことである。とりわけ軍事技術上の問題について言えば、黨員と軍隊が、実際に軍事訓練を行うところから手をつけねばならない。言うまでもなく、我々が近い将来、登場する時には、本格的な銃撃戦に十分勝利しうることを必要としているからだ。

— 1 —

マン方式による捜査、盗聴、同志の買収、スパイの送り込み、間接的な、右翼、一般人を使つてのスパイ工作等、赤軍派特別捜査本部は、ブルジョアジーの司令部の直令を受け、全国的に、何が何でも我々を毀滅させようとしたのであった。何故なら我々が、全階級間の焦点を形成し、我々の動向如何によつて、全階級関係が転換する可能性が十分秘められていたからである。我々は、これ等に対して、合法主義を濃厚に残し、党・軍活動の活動様式を全面的に転換することに不徹底であったのだ。即ち敵権力と戦闘状況が、深化すればいい程、我々は敵を知り尽し、敵には、味方することは絶対に知られてはならないのだ。第二に、作戦貫徹技術上の根本要素であることに極めて不徹底であったのだ。第二にそれ故、我々は、過去の如く政治過程の動向→即ち大衆の動向に合わせて作戦を立案すると言ふ体質を根本的に克服しなければ、敵に我々の動向を察知されてしまうのである。我々の動向を軸にして、政治過程を逆に攻撃的に作り形成していくことが、前提にならなければならない。このような情勢は実際成熟しているし、問題は、我々の動向の質にこそあるのだ。かかる過去の「大衆運動主義」階級形成の様式」から訣別し、闘争を貫徹してゆくことからは始めない限り、我々の技術上の強化は、決して実現はしない。即ち「権力」大衆・革命戦線「軍」党」の方向ではなく、「党」軍」革命戦線「権力」大衆」の方向に接近の方法と質をかえねばならないのだ。こうでないかぎり、「蜂起」軍事闘争」は準備されないし、党の機密は保持されないのである。即ちそれ故に、敵に知られず、このような質の闘争方法を実現し得るには、我々の組織が根本的に転換し、党及び軍の質を強化しなければならないのである。共青を、その本来の任務である、中央軍の構成員にしほり、革命戦線については、純然たる党と軍の兵站線として、シンパ、サイザーで構成し「党」軍」と革命戦線との間に、厳格な組織上の分離を行うこと。軍隊員は、厳密な資格試験を経て獲得され、かつ黨員は、原則として軍の中から一定の信頼を得ることの中からのみ獲得すること。獲得した後の、統制委員会の下での黨員点検、そして我々の活動方針・連絡等の内部交通は原則として上から下へ、組織の最小単位を通して伝達され、横の連絡を持たなくても耐え切れる組織でなければならないのである。

又、宣伝文書の伝達、手段は党→軍→革命戦線→大衆の質に応じて區別され、

共產主義者同盟赤軍派  
政治理論機関誌

赤軍 No. 5

発行 1969年12月8日

価格 200円

連絡先 TEL (03) 907-2487